

小林市埋蔵文化財調査報告 第12集

平川地区県営農村活性化住環境整備事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

## 広庭遺跡

2001年3月

宮崎県小林市教育委員会

小林市埋蔵文化財調査報告 第12集

平川地区県営農村活性化住環境整備事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

## 広 庭 遺 跡

2001年3月

宮崎県小林市教育委員会

## 序

本市教育委員会では、平成11年度より2ヶ年にわたり平川地区県営農村活性化住環境整備事業に伴う発掘調査を実施してまいりました。

本年度の調査では、弥生時代の花弁型住居が2軒発見されました。なかでも、そのうち1軒は火事により焼失しているという、他に類を見ないものです。また遺物も弥生土器を中心にガラス製の玉など多数が出土しております。これらは、昨年度の調査で出土した、江戸時代の陶磁器類とあわせ、今日の我々がいかにしてあるのかを知るうえで貴重な資料であり、今後の学術的な解明が期待されます。

本書が学術資料としてだけでなく、社会教育、学校教育の場で活用され埋蔵文化財保護に対する理解と認識が深まれば幸いです。尚、発掘調査にあたって御指導いただいた諸先生方、並びに調査に対して御理解、御協力をいただいた西諸県農林振興局をはじめ農村活性化住環境整備事業係諸機関や地元の方々に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

小林市教育委員会

教育長 山 口 寅一郎

## 例　　言

1. 本書は平成11・12年度に実施した平川地区県営農村活性化住環境整備事業に伴う広庭遺跡発掘調査の概要報告書である。

1. 調査組織は以下のとおり。

調査主体 小林市教育委員会社会教育課

教育長 瀬戸口克彦（～平成12年9月） 山口寅一郎（平成12年10月～）

課長 山口末男（～平成12年3月） 上原守義（平成12年4月～）

係長 堀英博

庶務 三澤悦子（～平成12年3月） 新田浩四郎（平成12年4月～）

試掘・調整 中村真由美

調査・概報担当 重留 康宏

作業員 [REDACTED]



整理作業員 [REDACTED]

1. 現場での実測は重留が行い、[REDACTED]が補助した。

1. 本書に掲載した造構図及び遺物の整理、実測は、重留、[REDACTED]が行った。

1. 本書の執筆、編集は重留による。

1. 本書では、方位は真北を、レベルは海拔標高で表示した。

1. 本書の土色等の色調は農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色帖による。

1. 本書で用いる略号は以下のとおり。

SA……豎穴住居 SC……豎穴状土坑 SE……溝状造構

1. 遺物は小林市教育委員会で保管している。

## 本文目次

第1章 はじめに	第1節 調査に至る経緯	6
	第2節 立地・環境	7
第2章 調査の概要	第1節 平成11年度 1－4区調査の概要	8
	2－1区調査の概要	10
	第2節 平成12年度 1－2区調査の概要	11
	2－3区調査の概要	19
第3章 小結		19

## 挿図目次

第1図 広庭遺跡位置図	6
第2図 広庭遺跡調査区位置図	7
第4図 基本層序	8
第3図 4区遺構分布図	9
第5図 2区遺構分布	12
第6図 SA-1 及び埋土堆積状況	13
第7図 SA-1 出土遺物	14
第8図 SA-2 及び炭化物出土状況	16
第9図 SA-2 出土遺物	17
第10図 SA-3 及び埋土堆積状況	18

## 第1章 はじめに

### 第1節 調査に至る経緯

平成8年度、県西諸県農林振興局から市教育委員会に、平川地区県営農村活性化住環境整備事業に伴う埋蔵文化財の所在の有無についての照会があった。

事業予定地の一部は平成4・5年度に実施された遺跡詳細分布調査で埋蔵文化財包蔵地であることが確認されていた。そのため市教育委員会は平成8・9年度に試掘・確認調査を行い、その結果遺跡が確認された。その後、県文化課、市教育委員会、西諸県農林振興局、平川地区土地改良区の4者で文化財の保存について協議を重ね、重機の影響を受ける範囲については記録保存の措置を取ることになった。

発掘調査は2ヶ年に分けて行われ、1区・4区合わせて5000m<sup>2</sup>を平成11年12月6日～平成12年3月31日まで、2区・3区合わせて3000m<sup>2</sup>を平成12年8月7日～同10月31日まで実施した。

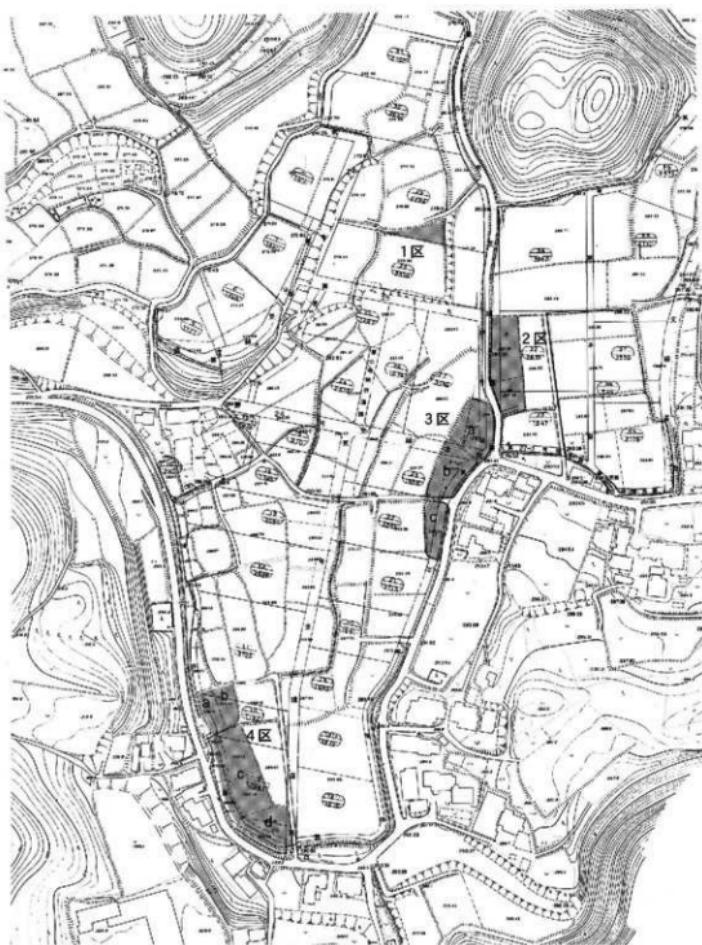
### 第2節 立地・環境

広庭遺跡は大字南西方字広庭に所在する。この地区は市中心部から西へ約4km。市東部を流れる辻之堂川の支流である、熊迫川に侵食されて形成された丘陵の中に存在し、周辺からは半孤立化している感じをうける。

この地区周辺において過去の発掘・報告例は数少なく、今回の調査は当地における基礎資料の集成が期待された。



第1図 広庭遺跡位置図



第2図 広庭遺跡調査区位置図

## 第2章 調査の概要

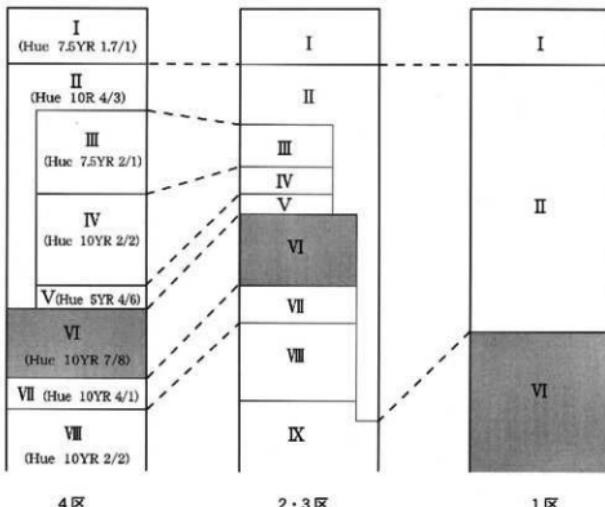
### 第1節 平成11年度

#### 1節 1～4区調査の概要（第3図）

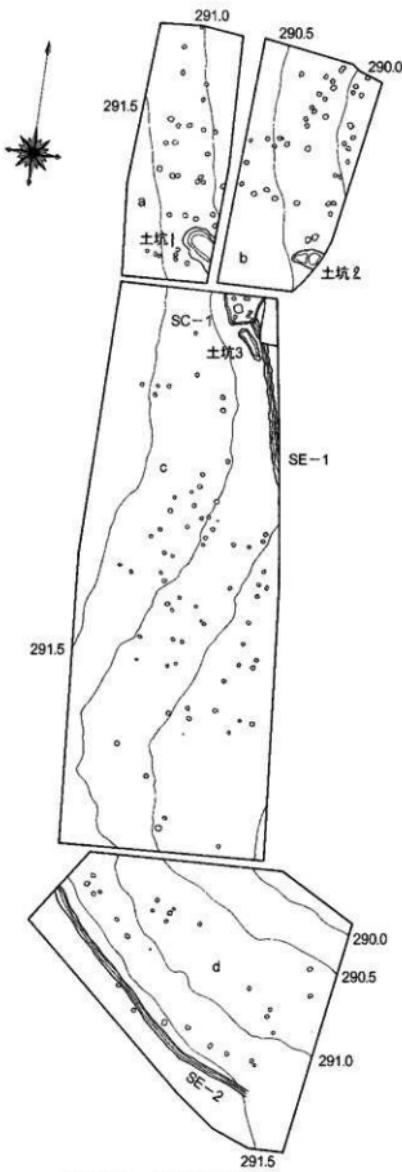
広庭遺跡の調査は4区から開始した。4区は当地区の南西部に位置し、北からa・b・c・d地区に細分した。現在の地形は西側にある丘陵から連なる急な傾斜地を切り取り、平坦にした形で水田にしている。耕作土を除去した段階ではa・c地区の東部は、ほとんど後世の耕作等により搅乱を受けていること、a・b地区はアカホヤ上層の黒色土の堆積が浅いが、その他は深く堆積しており、遺物は薩摩焼をはじめとする陶磁器類が出土することを確認した。

試掘の結果が不明瞭なために、それぞれの地区にトレンチを入れ、基本層序を確認した。以下基本土層柱状図にしたがって記述する。尚、この基本層序は全調査区に該当する。

I層は表土である。II層は耕作基盤土でⅢ層から2・3区に至ってはⅦ層までを搅乱もしくは搬入して形成する。Ⅲ層は黒色土で陶磁器類を含む。IV層は黒褐色土で弥生～近世の遺物を含む。V層は赤褐色土で広庭遺跡の遺構確認層である。VI層はアカホヤ層で下部に火山豆石を含む。VII層はカシワバン層。VIII層は黒色土で無遺物層。IX層は小林軽石層である。



第4図 広庭遺跡基本層序



第3図 4区遺構分布図

調査はまず重機で耕作土を剥ぎとった後、a・b地区から人力で遺構検出面であるアカホヤ上面まで掘り下げた。その後c地区、d地区も同様に調査を進めていった。

遺構としては、a地区からは土坑とピット群が、b地区からも土坑とピット群が検出され、掘立柱建物が両地区合わせ複数軒された。c地区からは竪穴状土坑と溝状遺構そしてピットが検出された。d地区からは溝状遺構とピット群が検出された。c・d地区とも掘立柱建物が何軒存在したかは判然としない。

その後、アカホヤ下層の確認調査を行ったが、遺物・遺構は確認されなかった。

遺跡分布詳細報告書において縄文時代の遺跡とされているため、この時期の遺物の出土が予想されたが、調査前に調べたとおり、陶磁器類のみの出土である。アカホヤ下層からも遺物は出土しなかった。遺物はc地区の遺物出土量が他を圧倒しており、その他の地区からは、ほとんど遺物の出土は見られない。

## 遺構

### SC-1

4区c北端部に位置する。アカホヤ上面からの検出であるが、後世の搅乱も激しいため遺構の全体像は判然としないが、柱穴を11個、土坑を1個有する方形プランである。

土坑内、床面とともに焼土は検出されなかった。埋土から陶磁器類が出土しているものの、この埋土は後世の流れ込みであり、時期推定の根拠に乏しい。

### SE-1・2

4区c北東端(SE-1)とd南部(SE-2)に存在する。両者とも床面に窪みやピットは確認されなかった。よって、この遺構の性格は運搬路というよりも周溝に近いと思われる。双方とも遺構内から陶磁器類が出土している。

### 土坑1・2・3

4区a(土坑1)・b(土坑2)にそれぞれ1基。c北端部に1基存在する(土坑3)。cのものは、形状からしてもイモ穴に近い。土坑1は、不整形で2ヶ所深い部分がある。最深部の床面はカシワパンである。土坑2は不整形で階段状に深くなる。

## 1節2 1区調査の概要

1区は調査区の中でも北端に位置する。東から連なる傾斜地を削平・盛土を行って畑を形成しており、搅乱が激しかった。遺物としては、4区同様陶磁器類が出土している。出土品から比較すると4区と同時期に形成されたことがうかがえる。

## 第2節 平成12年度

### 2節1 2区調査の概要（第5図）

調査は第2区から開始した。開始前試掘において層序が明確に観察されていなかったため、開始時に土層確認のためトレンチをいた。その結果アカホヤ上面の黒色土は過去の耕地整理及び耕作によって、大部分が搅乱を受けていた。またアカホヤ火山灰も削平を受けており調査区南西部などは、アカホヤ下層のカシワパン層が露出していた。

この結果を受けて、重機で表土ならびに搅乱を受けている黒色土を剥ぎ取った。その後、作業員の手によって遺構精査を行った。この作業によって、調査区中央部から北部にかけて花弁形住居2軒とピットが検出された（第5図）。これら遺構の周囲から弥生時代後期の土器が出土し、SA-1からガラス製品が2点出土した。またSA-2は調査の結果焼失住居であることが判明した。

#### 遺構

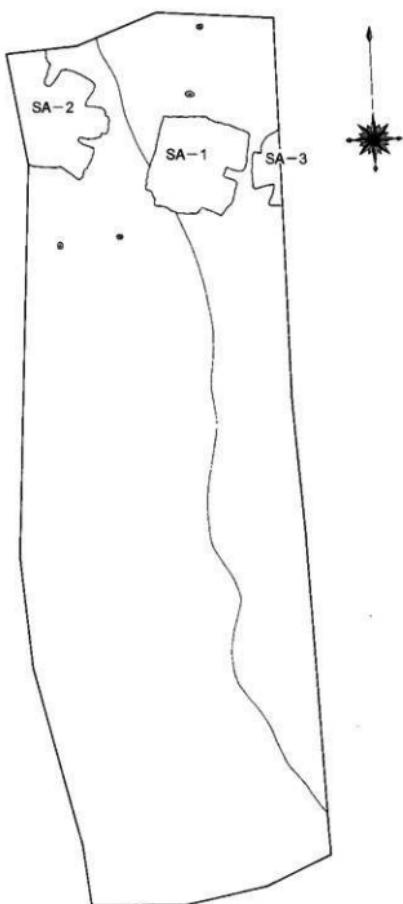
##### SA-1（第6図）

調査区北部中央に位置する。方形プランを基調とし、遺構東部に2個の突出部とベッド状遺構を持つ住居跡である。アカホヤの掘りこみであり、床張りは確認されなかった。突出部は2個とも掘り残して作られており、最初からこの形状の住居を形成しようとした意図が窺える。確認面から突出部の深さは10cm程度で、住居中心部は30cm程度の深さである。これは、遺構全体に渡り削平を受けていることに起因するものである。同様に遺構南部は搅乱をうけており、遺構全体の形状も判然としない。

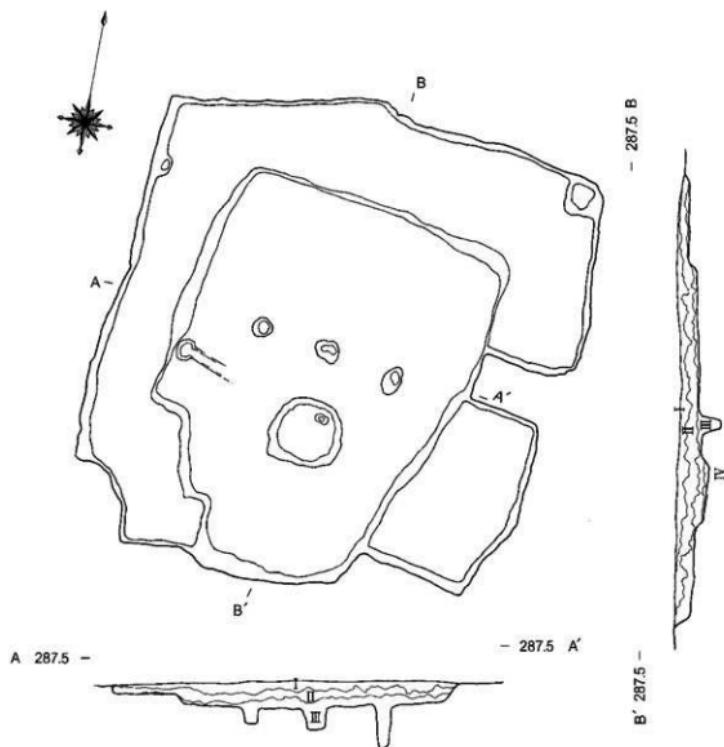
柱穴は突出部で2個、中央部に4個確認される。そして中央部の柱穴の南部には土坑があり、その内部にもピットがある。土坑内、および床面に焼土は無かったが、柱穴から柱が倒された跡が確認された。これは、人為的に住居を廃棄したものと推測される。このことは、この住居跡において遺物がほとんど床面から出土しなかったこと、ほぼ完形で復元された土器が無い事に、裏付けられよう。

##### SA-1遺物（第7図）

1～3は甕である。ともに口唇部は平坦に仕上げ、焼成も良好である。1は内外面ともに、ヘラで深くなでつけられている。2は内外面ともに、ハケ目による調整痕が残る。3は1や2に比べると小型の甕である。内外面ともにヘラナデの痕が観察できる。



第5図 2区遺構分布図



- I. 黒色土 (7.5YR 1.7/1) 粘性がなく、若干しまった土
- II. 黒褐色土 (7.5YR 3/1) Ah粒が若干混るサラサラした土
- III. 暗褐色土 (7.5YR 3/3) Ah粒が若干混るしまった土
- IV. 黑褐色土 (7.5YR 2/2) かたくしまった土、遺物の出土無し

0 1 2 3 4 5 m

第6図 SA-1 及び 埋土堆積状況

4・5は二重口縁壺の口縁部である。拡張部外面には、櫛描波状文が施される。

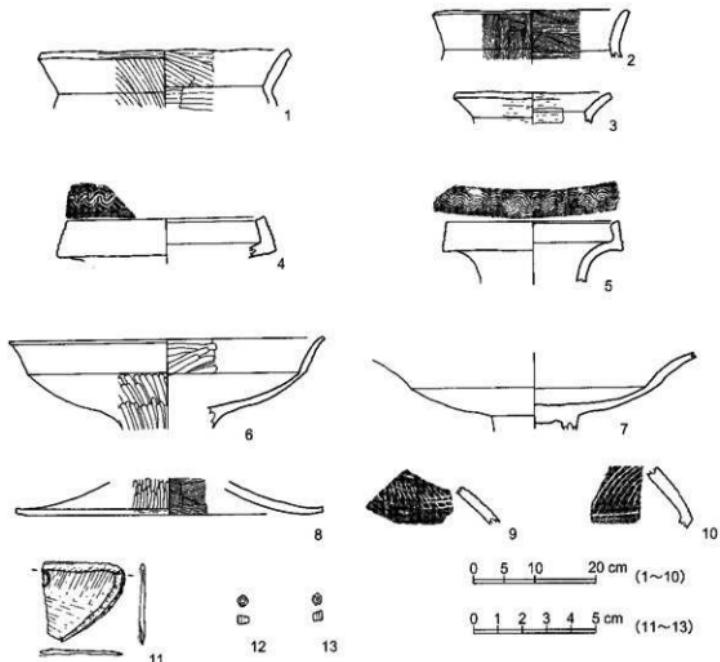
6・7は高杯の杯部である。6は脚部付部からゆるやかに内湾して口縁部がわずかに外反する。内外面ともヘラにより磨かれている。7は脚部付部から緩やかに広がっていき、口縁部もそのまま外反する。この2つのタイプが時期差を表すのかどうかは、解らない。

8は高杯の脚部である。外面はヘラによりみがかれ、内面はハケ目による調整の痕が観察できる。焼成も良好で非常に丁寧に作られている。

9・10は免田式の壺肩部である。SA-1からは数個体の免田式が出土している。

11は石包丁である。全面を砥ぎだして刃部を形成している。穿孔を試みた痕も見受けられるが不完全なまま作業は中止されている。

12・13はガラス製の小玉である。コバルトブルーの色調をなし、床面から2点出土した。県内においてその出土は、熊野原遺跡などを含め数例が確認されているにすぎない。県外に例をとってみても、墓に副葬されている例がほとんどであり、住居に伴って出土した例はほとんどない。



第7図 SA-1 出土遺物

#### S A - 2 (第8図)

調査区西端に位置する。遺構北西端には調査前のトレッジが入る。そのため遺構の形は判然しないが、不正形の円形プランを基調とし、突出部を4個とベッド状遺構を4個持つ花弁形住居跡である。アカホヤの掘りこみで、床張りは確認されなかった。突出部は、掘り残しによって作られている。S A - 1 同様削平を受けているが遺構の残存は良く、確認面から突出部の深さは 25 cm 程度で、同様に住居中心部の深さは 40 cm 程度である。遺構南部は擾乱されているが、ここにも突出部が存在した可能性がある。

柱穴は突出部で1個、住居中央部で3個確認された。住居中央部西側には土坑がある。この住居跡で特筆すべきは炭化物の多さである。住居中央部北側半分に放射状に広がるそれは、この住居使用当時、柱であったことが容易に推測される。床面は住居中央部全面にわたり、比熱により青黒く変色、硬化しており、土坑内も焼土が詰まっていた。遺物は、住居全面から出土しており、床面からも多数の土器が出土した。床面出土の土器はそのほとんどが熱により変色していた。

#### S A - 2 遺物 (第9図)

14~18は壺である。14は土器内外面ともうすぐナデられている以外調整が観察できない。口縁部はたるんだくの字形を成す。15は内外面ともナデられたのち、ハケ原体で削り気味に撫でられている。口縁部はシャープな形をしており、胴部の張り出しある他の土器より若干強めである。18は内外面ともハケ目により調整されている。口縁部の形状は14同様たるんでいる。

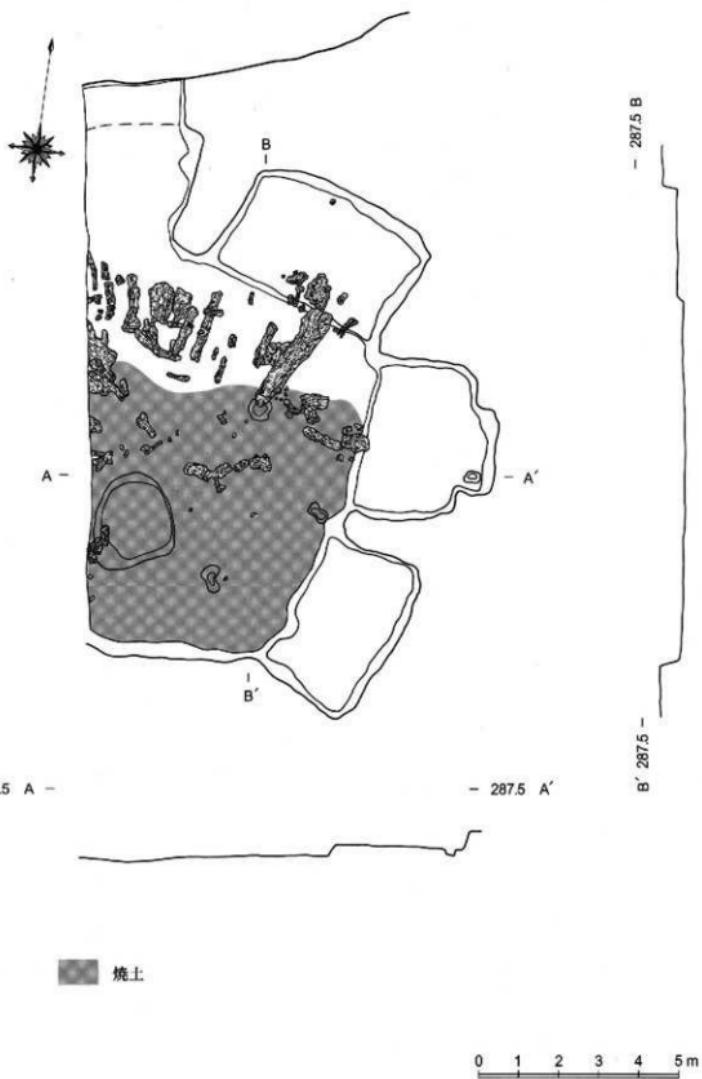
17・18はナデによる調整をへて再度ヘラにより内外面とも撫でられている。口縁部は、もはや辛うじてくの字形をなしているにすぎない。

19は鉢である。口唇部は丸く仕上げ、内外面ともにハケによる調整が施されている。

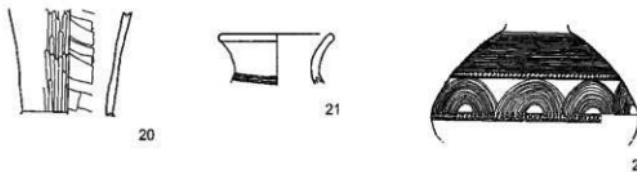
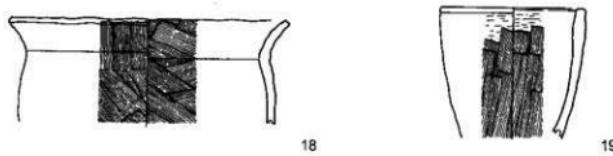
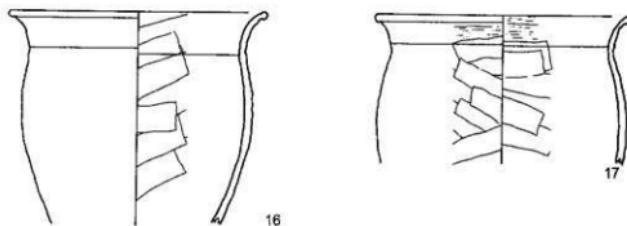
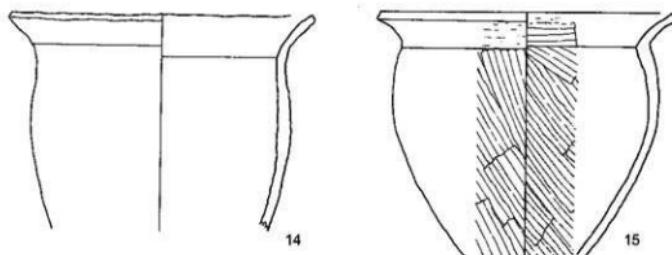
20は長頸壺の頸部～口縁部付近に該当する。外面はヘラで磨かれ、内面はヘラナデによる調整が施される。器壁は薄い。

21は短頸壺の口縁部である。口唇部は丸く仕上げ、内外面ともヘラで丁寧に磨かれている。外面の頸部には2条の沈線が施される。

22~26は免田式である。SA - 2 からは数個体の免田式が出土している。水落遺跡や大萩遺跡で出土しているものと同じタイプある。



第8図 SA-2 及び 炭化物出土状況

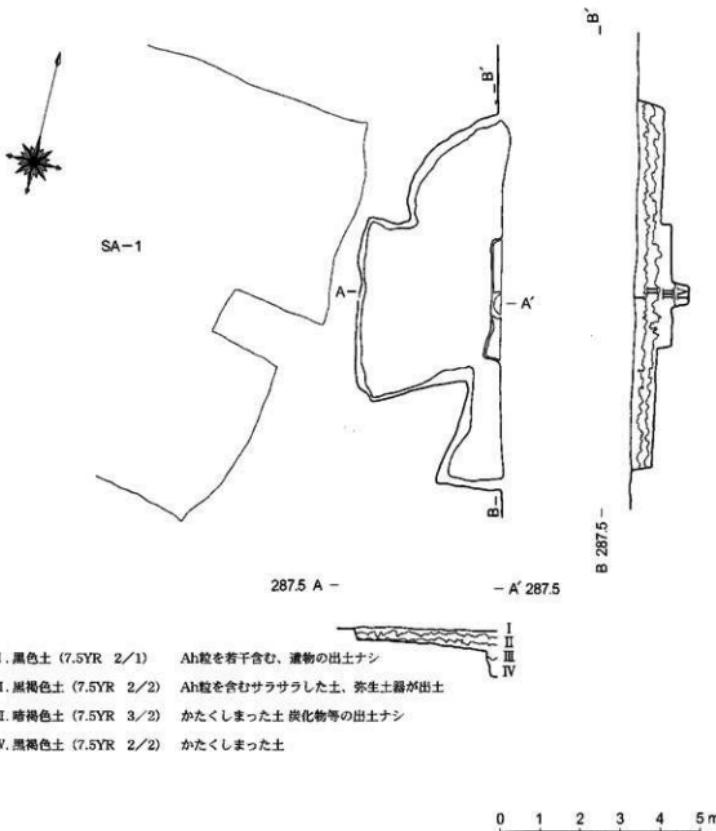


第9図 SA-2 出土遺物

SA-3 (第10図)

調査区東端に位置し、すぐ西側にはSA-1がある。遺構の形は判然としないが、方形プランを基調とし突出部を3個持つ花弁形住居跡である。突出部は掘りこみによってつくられており、床張りは確認されなかった。突出部と住居中央部の深さは同じであり、確認面からの深さは40~50cm程度である。

住居中央部には土坑があり、そこに柱穴と思えるピットがある他は、柱穴は確認されなかった。遺物は住居西側から出土しているが、全て床面から3~5cm浮いたかたちでの出土である。



第10図 SA-3 及び 埋土堆積状況

## 2節 2・3区調査の概要

2区の精査が完了した段階で、3区の調査を開始した。3区は、当地区的東部に位置する。南東部の丘陵から連なる傾斜地を切り取る形で耕地を形成している。そのため調査前から攪乱、天地返しを受けているであろうことが容易に想像できた。

2区同様、試掘の結果が明確にされていないため、調査前にトレンチを入れ層序を確認すると共に、遺物包含の有無を確認した。結果、試掘でアカホヤ火山灰とされていたものが小林軽石であること、アカホヤ上面は耕作により攪乱を受けており、アカホヤ自体も大規模な削平、攪乱を受けていることが判明した。またアカホヤ上面から遺物を発見することはできなかった。

この結果を受け重機により表土剥ぎを行った。アカホヤ上面の黒色土及び、アカホヤを重機で剥ぎ取り、カシワバンから人力で掘り進めていった。カシワバン、その下層の黒色土からも遺物、遺構は確認されなかった。そのため、地形の測量、土層実測を行い3区の調査を終了した。

## 第3章 小結

広庭遺跡は、弥生時代後期の住居跡及び土器、中世～江戸時代の陶磁器類が出土した。ここでは本報告に備え現状での問題点等を指摘しておきたい。

### 弥生時代

広庭遺跡の變形土器は、2つのグループに細別することができる。

A類 口唇部を平坦（口縁部断面四角形）に仕上げ、その中央部をわずかに窪ませるタイプ

（1～3、14、15、18）

B類 口唇部を丸く仕上げるタイプ（16、17）

本遺跡において底部の良好な資料に恵まれなかつたため、器形の全体像は不明であるが前者は後者に比較して胸部の器壁が厚く、調整が丁寧という傾向が看取できる。

またSA-2においてA類はB類の下層から出土していることや、口縁部属性の変化（断面四角形から丸形。くの字形が崩れていく過程）を踏まえると若干の時期差があるということが解る。しかしこの時期の変は、異なる形式のものが互いに影響を与え合い、並行して変化していくため厳密には時期差とは言い難いのかもしれない。

もう一つの疑問点として出土石器の少なさがあげられる。今回の調査で出土した石器はわずかにSA-1で出土した石皿と欠損した石包丁のみであった。磨製石器などの狩猟具、食物獲得のための生産道具 石皿などの食物加工具の少なさは当地域の他の遺跡に比べても少ないといえる。

花弁状住居には、それに伴うかたちで小規模な住居が营造されることが知られている。仮に、2区の北へ東側にかけて、2区の住居を含む4～5軒規模の集落が営われていたとして、SC-2を中心的な住居だとするとこの住居が焼失したがために、この集落が土器、石器を持って移動したことが考えられる。もっとも、2区北部及び東部の平地に集落が広がっているであろうことや、後世の削平により遺物が2次的に移動していたり、消失している可能性も考慮しなければならない。

またSC-2は弥生時代後期の焼失住居という、他に類を見ない貴重な資料である。今後の詳細な分析により、当時の建築資材や植生の復元など多方面での活用が期待される。

SC-1・2では免田式が出土した。従来、祭祀に関する遺物とされている。近年では住居内からの出土例も増え、長頸瓶と同様な用途が指摘されるなどその性格についても検討しなければならないだろう（林 1998）。

以上、資料整理段階であるが、広庭遺跡の概要報告を行った。今報告で、陶磁器の報告ができなかつたが現状での検討課題と含め本報告に期したい。

本書製作にあたり、桑畑光博、大學康宏、谷口武範、岡園みゆき、宮崎県埋蔵文化財センターの諸氏、諸機関には御多忙の中さまざまな御教示をいただきいた。末尾になりますが記して感謝いたします。

#### 主要参考文献

- 林真穂「免田式の編年と性格に関する再検討」『人類史研究』第10号人類史研究会 1998  
長友都子・長津宗重「水落遺跡」小林市文化財調査報告書第5集 小林市教育委員会1992  
谷口武範「槌田遺跡」宮崎県東郷町教育委員会 1991  
近藤協「八幡上遺跡・七又遺跡・銀代ヶ追遺跡」  
新富町文化財調査報告書第13集 新富町教育委員会 1992  
菅付和樹「熊野原遺跡A・B地区」宮崎学園都市遺跡発掘調査報告第4集 宮崎県教育委員会 1988  
菅付和樹「ひむかの弥生時代後期住居跡」『えとのす』31 1986  
立神次郎「王子遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書34 鹿児島県教育委員会 1985  
「堂地東遺跡」第2集 宮崎県教育委員会 1985  
長津宗重「日向型間仕切り住居研究序説」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告』第2集  
宮崎県教育委員会 1985  
石川恒太郎 他「大荻遺跡（1）」宮崎県教育委員会 1974  
茂山護・日高正晴 他「大荻遺跡（2）」宮崎県教育委員会 1976  
北郷泰道「祝吉遺跡」都城市文化財調査報告書第1集 都城市教育委員会 1981  
面高哲郎「祝吉遺跡」都城市文化財調査報告書第2集 都城市教育委員会 1982  
石川悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案一素描（M.k. II）」宮崎考古  
重山郁子・山田洋一郎・東憲明「中大五郎第一遺跡・中大五郎第二遺跡・本池遺跡・前畠遺跡」  
都城市文化財調査報告書 34 都城市教育委員会1996  
中村直子「薩摩半島東部における弥生時代後期土器の検討」『鹿児島考古』第31号  
鹿児島考古学会 1997  
山中悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案」『研究紀要』 NO.9 宮崎県総合博物館 1983  
「内野々遺跡」林業試験場建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 宮崎県教育委員会 1992



広庭遺跡調査区



4区調査状況



2区・3区調査状況



4区調査状況



SA-1検出状況



SA-1調査状況



SA-2 検出状況



SA-2 調査状況

## 報告書抄録

ふりがな	ひろにわいせき
書名	広庭遺跡
副書名	平川地区県営農村活性化住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書
シリーズ名	小林市埋蔵文財調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	重留 康宏
編集機関	小林市教育委員会
所在地	宮崎県小林市大字細野38番地1
発行年月日	2001年3月31日
所収遺跡名	広庭遺跡
遺跡所在地	宮崎県小林市大字南西方字広庭
調査期間	平成11年12月6日～平成12年3月30日 平成12年8月7日～平成12年10月30日
主な時代	弥生時代、中世～近世
主な遺構	花弁状住居
主な遺物	弥生土器、ガラス小玉、陶磁器